

1 2 危機を乗り越えて「安心」へ向かって歩み続ける東京の水道

小河内貯水池の完成に続いて、昭和 35（1960）年には東村山浄水場が通水を開始しました。

しかし、東京の水需要は高度成長経済による人口や産業の集中、生活様式の多様化等に伴って急激に増大してとどまるところを知らず、加えて、この時期の多摩川は毎年のように渇水に見舞われました。降水量が少ないうえに、過大放流を強いられた小河内貯水池はたちまち底をついてしまいました。

急増する水需要の当面の対応として、金町浄水場の施設能力を増強させる方策がとられました。江戸川からの取水を増加させ（江戸川系拡張事業、日量 9 万 5 千立方メートル、昭和 38（1963）年通水）、また中川の余剰水を江戸川へ導いて取水する（中川・江戸川系緊急拡張事業、日量 40 万立方メートル、昭和 39（1964）年通水）といった事業があいついで行われました。

一方、根本的な対応策として、東京にとって長年の悲願である利根川からの取水に向けて着実な努力が払われていました。昭和 38（1963）年 11 月に利根川系拡張事業の認可を受け、昭和 39（1964）年 4 月に起工に至ります。

ところが、この年は昭和 36（1961）年から毎年続いていた多摩川の渇水が、最大の危機に直面しました。5 月から雨が少なく 7 月には極めて深刻な事態となり、10 月開催の東京オリンピックへの影響が心配されました。7 月 22 日、国、水資源開発公団、都の関係各者で東京都水不足緊急対策会議がもたれ、利根川からの通水を 1 日も早く行うことが最良の策であるとの結論に至ります。文字どおりの突貫工事で、公団は秋ヶ瀬取水堰と朝霞水路の工事を、当局は朝霞・東村山浄水場間の原水連絡管工事を急ぎ、8 月 25 日には荒川の水が東村山浄水場に導水されたのです。

昭和 40（1965）年 3 月に利根川・荒川間を結ぶ武蔵水路がほぼ完成し、ここに利根

川からの取水が実現されました。その後、4次にわたる利根川系水道拡張事業によって、朝霞（昭和41（1966）年）、小作（昭和45（1970）年）、三園（昭和50（1975）年）、三郷（昭和60（1985）年）の各浄水場が新設、増強され、既設の金町浄水場も増強されました。また、給水所、幹線網等も整備されました。

新しい浄水場が次々と建設される一方、昭和40（1965）年3月、東京近代水道のさきがけとなった淀橋浄水場が新宿副都心計画の具体化に伴い、その機能を東村山浄水場に移して廃止されました。

日量24万立方メートルの施設能力でスタートした東京の近代水道は、現在では日量696万立方メートルで世界有数の水道に発展しました。東京の水道は、ライフラインとして都民の暮らしを支え、都市活動に不可欠なものとなっています。

しかし、頻発する渇水、水源水質の悪化、震災時の給水確保、施設の老朽化等多様な課題をかかえています。

将来に向けて安全でおいしい水を安定して供給していくため、江戸・東京水道の先人たちが築いてきた偉業に学びつつ、新しい社会の潮流を踏まえて東京の水道は「安心」に向かって歩み続けます。